日統社編輯

杉聖喜精

特248
793

日統社刊行

始

特248
793

日統社編

杉野喜精

日統社刊行

昭和八・六・四
帝國圖書

序

今までに――杉野喜精氏――を編しやうとして努力したことは數回に及んだが何時も資料が集まらないので、其儘になつてしまつた。

勿論其間には、懇切に御教示下さつた方々もあつたので申譯がないと思ひながらも、乍うすることも出來なかつた。

色々考へた結果資料を纒めて置くだけにもと不完備ながら出版することにした。材料の關係から妄評を敢てしたことを讀者及杉野氏に御詫する。

皇紀二五九三、七、二三

著者

杉野喜精氏

——目　次——

證券界の杉野氏……一
銀行家を志望……三
日銀時代……八
佛教信者になる……一一
名古屋銀行の支配人……一二
名古屋去る……一八
證券界に入る……二一
山一證券と杉野氏……二四
文藝に親しむ……二九
杉野氏と宗教……三二

杉野喜精

日統社編

證券界の杉野氏

杉野喜精—云ふまでもなく證券界の異彩山一證券株式會社の社長であり、實業界一方の旗頭、杉野氏のことである。地方銀行の支配人から身を轉じて兜町の人となつたのは明治四十年。德望を以つて知られた小池國三氏の後を繼けて、冷靜、着實に山一證券の今日を築き上げた、その透徹した頭腦とカドのない人柄は一面小池氏に似通つたところがある。

永年取引員組合の役員や委員長なども勤めて來て、東株市場關係のことには直接間接に盡して來たところから、今では南波、小布施兩氏と共にこの島の元老として立てられてゐる。殊に杉野

氏の煥發な才氣と緻密な頭腦は、何時しか組合の指導的立場に置かされてしまつた。市場や組合等に種々な問題の起つた際などに於ける秩序整然とした彼の理論には尠しのスキがない。

時には剃刀の如き斬味を見せる。その一面に尠しの間隙もなく、全くの堅實性を藏して居つて、一擧一動、いゝさかも輕擧盲動をせぬ重厚さがある。山一證券の信用も之れあるが爲めであらう。

公社債七割株式三割、の營業方針でズット押し通して來た山一證券は近年公債の取扱高は愈々莫大となつた。全國の公債發行高の三四割を引受けてゐると稱せられてゐるのも決して誇張ではないやうだ。兎も角こうした山一證券は兜町の特異な存在であると共に彼もまた一面變つた存在でもある。

公債に主力を傾到して苦勞して來ただけあつて、今ではこの方面に於ける造詣が深いことは、斯界第一の定評があるのみならず實業界にあつても、彼の右に出ずる人は尠ないであらう。而かも財政經濟上にも確りした一見識をもつてゐる。

嘗て井上準之助氏は藏相時代、所謂金解禁前後の經濟界重大時期に、國債問題について、彼の意見を度々求めたといはれてゐる。

山一證券は今日全國の支店、出張所を合して、三百有余名の社員を擁し、それが一糸亂れず組織的に整然としてゐるのは、彼の卓越した經營の手腕によるところが多いであらう。

今や證券界は、未曾有の低金利と共に非常の活況を呈しようとしてゐる。彼は本年六十四歳、『五十六十は鼻垂小僧、男盛りは眞つ八十』だといつて、最後まで大日本麥酒に頑張つて居つた元氣な馬越恭平翁の言葉からすれば未だ所謂鼻垂小僧であるわけだ。

事實、財界でも油が乘つて確りした仕事振りを見せてゐるのは彼の年頃である。

銀行家を志望

杉野氏の生れたのは、明治三年九月六日、王政復古の直後で政府が銀行制度、貨幣制度、公債制度、を確立しやうとした年、處は奥州、今の青森縣の弘前で八師團のある地。

父は杉野喜永といつて津輕藩士、江戸詰めであつたが、彼の生れた時分には維新の騒ぎで歸藩してゐたらしい、彼は姉と二人姉弟の長男であつた。

父喜永氏は非常に眞面目で謹嚴なところもあつたが、どちらかと云へば律義者、惡くいへば偏屈であつた。だから家計のことなどはトンと意に介せぬといふ風であつた。廢藩置縣となつて父と共に東京へ出て來たのは彼が三歳の時で、本所業平橋附近に住つてゐた。

だが、父は相變らずそうした性質から定まつた職にも就なかつたし、『商人など』と―武士のプライドから、商賣に關係するのをどうしても好まなかつた。祿を離れた彼の家庭生活が漸次窮迫してゆくのも當然であつた。

『眞面目な人であつたが、生計は何時もらくではなかつたやうです』と當時のことを筆者に語つた人があるから、貧乏とは云へないまでも相當窮迫してゐたのは事實である。

かういふ家庭のきりまはしをする彼の母八十さんの苦勞もなみ大抵でなかつたらうと察せられる。母は當時のことだから學問はなかつたが勝氣なところもあつて、この家庭にはよき妻であり、

よき母であつた。苦しい一家の切盛りをしながら時には氣むづかしい夫に仕へ、その間愛兒の養育にいそしんだのであつた。

物質的には余り惠まれない、こうした環境の中に育てられていつた。然し兩親の膝下でせめて少年時代を過すことの出來たのは一面幸福でもあつた。

だがこの幸福も永くは續かなかつた。小學校を出て間もなく彼が十五六歳になつた時、早くも人生の第一の試練を受けなければならなかつた。それは一家の大黑柱である父喜永氏が、假初めの病で急逝したからである。

父を喪つた彼は前途に不安を感じ出した、總ての希望も根底から覆かへされた。暗い陰鬱な幾日かゞ過ぎて。

健氣な母は或日『お前は長男ではないか、今グヅ〳〵してゐて、誰が杉野の家を興てる者があるか』と彼を鞭韃した。

母の苦勞を見るにつけても、深く自分の責任を感じて、もうジツトしては居られない。學費も

充分にないところから、獨學しても身を立てやうと夢中に勉强するやうになつた。

其頃彼の叔父飯田巽氏は、日本銀行の理事として相當羽振りをきかせてゐた。津輕藩士で、以前藩の會計をしてゐた關係から大藏省に入り、後になつて日銀に國庫局が出來ると其れに局長として就任し、昇進して理事となつたのである。

この叔父が日銀にゐた事が、當時彼が金融界に志す動機ともなり、且つ生涯金融界に身を置く機緣ともなつたのである。

或る日、彼は喜び勇んで戸外から駈込んで來て『今度銀行事務講習所が大藏省で開設される、叔父さんのやうに銀行家になる考へだから入學したい』と母に願ひ出た。一瞬、母の顏は曇つたやうであつたが、吾が子の將來を考へてか、快くこれを容した。父なき後は母の手一つでやつてゐる家庭事情を知る彼は、母のこの愛に對して、深く感謝せずにはゐられなかつた。かくて十七歲の春この講習所に入學した。

元來銀行事務講習所と云ふのは、大藏省が金融機關の發達に連れて、それに伴ふ事務的智識を

授け、人材を養成する爲めに開設したものであるが、經濟學大意、商法學、簿記精法、銀行條例、算術など當時では隨分專門的に亘つて敎へてゐたらしい。毎日〳〵比較的難かしい專門的なものや、細い數學などをやらされるので、最初の意氣込みは何處かへ消し飛んでしまひ、缺席する者などが出來たりして、次第に不眞面目な生徒が多くなつて行つた。その証據には入學する際は三十八名であつたのが、二十二年の卒業の日には、全科を卒業した者はたつた五人であつた。

其の間にあつて彼は眞劍に勉學に力めた。然し當時の彼には後年の如き機敏な叡智の閃めきもなく、細心の注意あるでもなく、寧ろ反對な『ずんぐりむつくり』した青年に過ぎなかつたと云はれてゐる。だか二十二年の卒業生五人の中の一人であつた事は相違はない。

銀行事務講習所を出たところから後年杉野氏は一ツ橋校友會員となつてゐる。

それは明治七年、大藏省が銀行事務家を養成する爲めに銀行學局と云ふのを開設した。それが閉鎖されて銀行傳習所が出來、續いて簿記傳習所となり、銀行事務講習所の開設となつた。ところが、この時大藏省から、文部省に移管されることになつて、現在の商大、其頃の東京商業學校

に附屬せしめられてゐる。

兎も角一ツ橋に關係あるのは事實であるといふので『君も校友だ、是非如水會に這入つて貰ひたい』と一ツ橋の連中からジヤン〳〵勸められて、遂に何程かの寄附金をさせられてしまつた。

日銀時代

銀行事務講習所を卒業した杉野氏、は二十歳で、我國金融の中心、日本銀行に勤務するやうになつた。

勿論叔父飯田氏の力添へもあつたからであらう。しかし、飯田氏はその三四年過ぎ、明治二十五六年に、日銀を辭して、郵船會社の取締役となつてゐるから、これ以外には日銀時代に世話になつた樣子もない。

杉野氏の日銀での行員生活は二十七歳まで、卽ち明治二十九年まで續けられた。

かういつてしまふと、甚だ平凡に經過してしまつたやうに思はれるが、彼にとつては決して平

凡、無意義な期間ではなかつた。否寧しろ、この七年間こそ彼が將來、驥足を伸ばす、修養時代であつた。

其の間には、二十二歳の時に、家督を相續して若くして戸主となつた。書記から漸次累進してもいつた。

經濟界の實情にも通じて來て、金融關係が事業の消長の上に、如何に大きな問題であるかも解つて來た。日銀の僅かな金利の動きも、一般經濟界に大きな波動を及ぼすことも知るようになつた。

又彼の公債に對する基礎的知識もこの時代に培かはれた。事務的方面も錬達して來た。

こうした幾多の活きた學問と體驗は、机上の勉强で知ることの出來ない、貴い學問であつた。

細心なくせに太つ腹なところがあり、物事に頓着しないかと思へば、それでまた、妙に緻密な——あの複雜した性格の中に、次第に叡智の閃きを見せて來たのも、この時分からである。

飯田氏が彼の將來に期待をかけて、二女やまさんと結婚させたのもこの頃である。

明治二十九年、新婚間もない二十七歳で、遂に拔擢されて地方銀行の副支配人として赴任することになつた。

恰度日清戰爭直後で、一般經濟界は非常に活氣を呈して、地方產業も殊の外の發展振りであつた。隨つて金融界も一般に積極的營業方針をとるやうになつた。その際名古屋の第十一國立銀行と、第百三十四國立銀行とが營業滿期となつたので、兩行が合併してこゝに愛知銀行設立の議が重役間に纏つた。

そこで、支配人副支配人を中央に求めて來た。

當時の日銀總裁は川田小一郎氏で營業局長は現內閣の山本達雄氏であつた。山本氏はこの人材について熟慮の結果、杉野氏を副支配人として推薦した。

『君なれば相當の成績を擧げることが出來ると思ふが、愛知銀行へ行てみては乍うか』と才氣を見込んでの山本氏の言葉に、彼は非常に喜んで承諾の旨を告げた。

かくて明治二十九年七月、東京を去つて名古屋の人となつた、恰度同年には、彼が後年公債政策に就いて、献策したと傳へられてゐる、金解禁の立役者井上準之助氏が、大學を卒業して、日銀へ月給三十圓で這入つて居るから面白い、

佛教信者になる

名古屋——中京と云ふだけあつて、東京と京阪をコンデンスしたやうな所である。近年は飛躍的發展を遂げて、大名古屋市を建設したが何時も、東西の經濟的關ヶ原となつゐて、財閥的な擡頭は望めない所だ。

名古屋人は一體因襲的に引つ込み思案なところがあつて、容易に他國人の仲間にも這入らなければ、入れることもしない、頗る堅實主義である。これが中央にまで乘り出す財人の尠ない一因でもある。だから斯うした名古屋人に交はつて事業をすることは頗る困難とされてゐる。

日銀仕込の彼が滿々とした覇氣を藏して行つてみると、こうした極めて地味な土地柄である。殊にモダンで瀟洒な好紳士型の彼であり、夫人も亦派手好みの美人だつたといふから、意外の感

にも打たれたらしい。

だが赴任間もなく、好景氣の反動が現はれて、金融界も漸次多難となり、愛知銀行としても非常に警戒しなければならなくなつて、副支配人である彼の仕事も勢ひ緊張を要するものがあつた。其頃フト病の爲めに床に付いた。

最初は『忙しかつたから無理をしたのだらう』位に考へてゐたのが、だん〳〵重くなつてゆくのみであつた。

日頃から余り物事に頓着しない彼も、自分のこの病には心配しない譯にはゆかない、色々と醫藥に手を盡したが、乍うしてもよくならない、日々病は進む傾向であつた。

かくて或日醫師から最も不幸な病名を宣告された。彼はドン底へでも、突き落されたやうな感じがした。生に對する不安と焦燥に日夜心を痛めた。

醫藥の及ばないことを知つた彼の日々は、最早、病魔と闘ふのでなくして死―との闘ひである。

そこで縋つたのが、無限の力―即ち信仰である。信仰の力によつて病氣を克服しやうと決心して、日夜精進夢中になつて祈つた。

一心不亂になつて念ずる中、その熱心さに病魔も堪らなくなつたものか、不思議にもメキ〳〵と快癒して、遂に健康を取り返すことが出來た。

宗教の力の偉大さをツク〳〵感じて其後は心からの佛教信者になつた。

名古屋時代の十年間はこの宗教的念力を以て常に病氣と戰つたもので、六十四歳の今日まで尙ほ健康を保持してゐるのは全く信仰の賜である。

彼はそれ以來無二の精神療養としてこの佛教の信仰を友人などに薦めてゐるやうである。

それは兎に角全快した後の彼は相變らず愛銀に姿を現してゐたが、明治三十四年在職五ケ年で俄に名古屋銀行の支配人として轉じて行つた。

名古屋銀行の支配人

杉野氏が名古屋銀行の支配人となつたのは三十二歳の七月である。

覇氣に滿ちた壯年時代だけに、こゝ數年間は最も華やかな活躍振りを見せてゐる。それには名古屋銀行が愛知銀行に較べて保守的でなく、思ふ儘に才腕を發揮することが出來たにも因るであらう。

元來名古屋銀行は明治十五年創立の古い歴史を有つてゐて、同地方でも最初の私立銀行で、瀧定助、同兵右衛門、森本善七、近藤友右衛門などの中京一流の商人によつて發起されたゞけに、愛知銀行が、尾張の殿様徳川侯や伊藤治郎左衛門などの素封家によつて固められたのに較べて、極めて、積極進取な氣分が多かつた。

而も、仕事愈旺盛な壯年時代であつたから、彼にとつては最もよき働き舞台であつた。

恰度彼の就任した頃の經濟界は金融恐慌の眞最中であつて、これが關西を中心としてゐたゞけに、名古屋地方は殊の外警戒を要する時期であつた。故に就任早々一般貸出しを嚴戒すると共に預金の吸收の爲めに大童とならなければならなかつた。

こうした金融恐慌の際は何時も小銀行の預金が大銀行に集中されて、小銀行の經營者は非常な困難に遭遇するのが常である。而も名古屋銀行は小銀行とは云へないまでも、愛知銀行などゝ比較すると資本の上に於いても二百萬圓に對する五十萬圓といふ懸隔があつたので、その經營上には非常な苦心を要したものである。

しかし、この恐慌も翌年頃から漸次恢復して、三十七八年には日露戰爭による大好景氣時代を迎へるに至つた。それと共に地方産業も急速な發展を遂げたので、彼は名古屋銀行の積極的發展を企圖して、三十八年には堀川銀行を買收し、續いて幅下銀行、津島銀行をその傘下に置くに至つた。而して同年兩行の取締役に就任した。

一方資本金增加の必要に迫られて三十九年には、一躍資本金を百萬圓の銀行となし、遂に確固とした信用を築き上げたのである。

彼は當時、ともすれば消極的な中京銀行界に在つて、常に鮮やかな動きを見せ、その水際立つた仕事振りは、中京財界の大きな刺戟であつた。名古屋銀行時代には銀行以外色々の仕事に關係したが、手形交換所の創立については隨分盡力したやうである。

明治三十四五年頃に中京銀行界の一部から手形交換所の設立の必要が叫ばれるやうになつた。これが漸く具體化して最後に決定をしようと會合の開かれた時のことである、

その際の議長兵藤氏は最初からこの設立を尙早なりと考へてゐたので、勢ひ會議を自分の方に傾けようとした。だが例の引込思案から、今まで、この設立に努力して來た人さへも、正面から反對するに躊躇してゐた。

しかしこの手形交換所の設立如何は中京金融界將來の發展の爲めに、焦眉の急に迫られてゐる問題であつた。だから決して所謂『禮讓』の態度をとるべき場合ではなかつた。

この有樣を見て默してゐる秋ではないと考へた杉野氏は、憤然起つて議長の不公平を詰問したのであつた。すると議長兵藤氏は大いに立腹して『自分が不公平ならば議長を退りぞく』と言ひ放つた。

これは常に斯うした會合が成るべく圓滿にといふ事勿れ主義で、靜かに終るのが慣ひであるから、强く出れば納ると考へたからであるらしい。

だが彼はすかさず『直ちに退ぞけ』と追擊したので、流石の紳士國も大騷ぎを演ずるやうになつた。お蔭で大勢が卽行論に傾いて間もなく手形交換所も創立されることになつた。

これなどは彼の負け嫌ひな一面を現すと共に、自分の信じたことは遠慮なくヅケ〳〵といひ得る性格をよく示すものである。それ以來明治四十年まで手形交換所及び銀行集會所の常務委員に擧げられてゐた。

その他當時名古屋市には銀行として最も重要な信用調査機關である商業興信所がなかつたのでその創立に努力するなど、中京金融界の爲めに尠からず盡したやうである。

又、名古屋木材、東海倉庫會社を創立して取締役となり、事業界にも顏を出してゐた。

明治三十七年名古屋市會の改選に際して三級から市會議員に選出されてゐる。だがこれは、彼を取卷く一部の人達が勝手に押したてゝ當選さしたのであるから、勿論卽時辭任してしまつた。が、これなどによつても當時如何に信望を擔つてゐたかといふことを知ることが出來よう。

名古屋を去る

杉野氏が名古屋銀行取締役支配人――その頃取締役になつてゐた――を辭すると共に、一切の關係を斷つたのは、明治四十年六月である。

それまで中京財界に冴えた腕前を見せてゐた彼が突然、名古屋を去つたに就ては、『積極主義でやり過ぎた』とか『後藤を援け過ぎた』とか色々當時噂されたものであつた。しかし、其には次の樣な經濟事情もあつた。

日露戰後の好景氣が極端であつたゞけにその反動も大きかつた。三十九年頃から多少の兆候を見せてゐたのが四十年一月になつて、俄然株式の大慘落となつて現はれた。

例へば東株は一月七百八十圓の高値を示して居たのが、五月になると百參十圓といふ取引所始つて以來の大きな開きを見せてゐる。

この株界未曾有の大波瀾の影響は、軈て一般金融界にも及ぼして、株式と深い關係のある銀行

は、バタ〳〵と倒れる位の極端な打擊を蒙つたのである。

殊に名古屋地方の銀行は土地柄だけに從來から、株式と密接な關係があつたので、同地の小栗銀行などは眞先に窮狀を暴露してゐる。名古屋銀行も亦其の渦中に在つて、遂に預金の大部分を引出される樣な結果になつた。

杉野氏はその間にあつて極力貸出しを嚴戒すると共に、一方日本銀行其の他から救援を受けて兎も角事なきを得たが、その責任を深く痛感して、在職六ヶ年を以つて遂に辭職することになつた。

勿論それには後藤新十郎氏との關係もあつたやうである。

後藤氏は名古屋附近の西春日井郡の生れで、子供の頃から伊勢町(株式街)で人となり、二十五歲で早くも獨立して證券業を開いてゐた。才氣もあり度量もあつて、株式界打ツつけの人間であつたゞけに、後には財も積み、市會議員にもなり、何んと言つても中京第一流の人物であつた。

この名古屋人には珍らしいキビ〳〵した男らしさに、杉野氏も共鳴して交際するうちに、肝膽

相照すやうな間柄になり、例の仁俠的なところから、特に力瘤を入れたのも事實であるらしい。

それは兎に角、名古屋は壯年時代の十二ケ年間を過して、色々の仕事を殘して來たゞけあつて彼には一つの強い執著があつた。又友人達の間にも極力引留める者もあつたが、斷然意を決して第二の故郷とも云ふべき名古屋を去ることになつた。

一夕友人達ちは訣れを惜んで、納屋町の得月樓らしい思ふが、兎も角一流の料亭に於て送別會を催すことになつた。

彼が出席して見ると中京一流の實業家を殆んど網羅した顏觸れである。最早失脚した自分に對して、斯くまで多くの人が集つて呉れたことに、殊の外感謝せずにはゐられなかつた。

而もその場の情景は床の間には佛畫を懸け、白い蓮華の花が活けられて、並み居る人は悉く黑紋服姿で、全く葬儀に相應しい有樣であつた。

これを見た彼は、自分が名古屋を去るのを惜しむ訣別の氣持ちと、甦生杉野の將來を祝福するものであると直感して、早速帳場へかけ込み三角の紙切れを額にあて、亡者を氣取つて座席に就いた。

親友日本車輛の常務原田勘七郎氏は衣を羽織つて、亡者に對し引導を渡すやうな調子で『名古屋の杉野は死んだが、東京で生きる杉野はこれからである』と激勵した。

この時、名古屋銀行集會所からは『昇天の龍』を彫刻した銀製の花瓶を、三井銀行の矢田積氏は「蛟龍出地中」と揮毫した額を餞別としてそれ〳〵贈つた。

その總ては杉野氏將來の大成を祈る誠心の表はれであつた。

斯うした深い同情の中に名古屋を去つた彼には、今尙ほこの地は深い印象に殘るところであり彼の何處かに名古屋的な氣持の見えるのはこれが爲めであらう。

證券界に入る

其後間もなく東京へ出た杉野氏は、日本橋區南茅場町藥師堂附近に、名古屋市のマークに因む丸八の商號を以て株式現物店を開いた。

開業したとは云へ、何分銀行畑から急に寸刻を爭ふ證券界に這入つて來たのだから、隨分初は勝手違ひのことも多かつた。時には、田舍者扱ひをされて、素人らしい苦い經驗も度々嘗めたやうである。

だが、元來計數にたけてゐたのと、永年銀行に勤めてゐたのであつたから、全くの素人とは違ふわけで、そのうちには、直取引仲買人となり、實物を專業として取扱ふやうになつた。

當時、國有鐵道の交附公債などが盛んに賣買されてゐたので、主力をこの方面に注いでゐたやうである。しかし斯うした取引には尠からぬ資本が要つたから、開店して間もなくでもあり、信用もなかつた彼には、却々困難なものがあつた。嘗ては名古屋銀行の支配人として、信望を擔つてゐたのにひきかへて——信用が如何に大切であるかといふことをしみ〴〵感じたに違ひない。

その頃、杉野氏の眞面目な營業振りと、紳士的の人柄を見込んで、有形無形の力を與へて呉れた人に小池國三氏がある。

小池氏は當時兜町で小池合資會社を經營して、手腕といふよりも寧ろ德望を以て知られてゐた人であつた。而も、堅實な經營振りで現物に重きを置いてゐた。

明治四十三年政府が第二回四分利公債一億圓を發行した時、神田鐳藏、福島浪藏氏らと共に現物團を組織して、東京大阪シンジケート銀行團から五百萬圓の下受けをしたが、これが證券業者として公債を引受けるやうになつた最初であつた。

とも角この公債引受けなどによつて、現物部を充實する必要が起つたので、相當の人材を求めてゐた。そこで、杉野氏の經驗と人物に着目して入社を勸めた。その結果杉野氏は開業三ケ年にし小池合資會社の出資社員となつて、現物部を擔當するやうになつた。

その後、調査部長を兼ねたり、明治四十四年小池氏が商榮銀行を買收して頭取となると同時に其の取締役に擧げられた。

かくて大正六年となつた時、『自分は證券界に入る最初から、この營業は十年間を以て運命を決しようと決心して、その間最善の努力を盡して來た。しかし、十年目になつたときには從業員も多勢となり、得意も澤山出來てゐたので、種々の關係からどうしても廢めることが出來なかつた、

だから今十年を繼續し、その時には如何なる事情があつても素志通り決行する考へであつた。それが今日になつて見ると一層社員も增加して、社員の將來を考へると、乍うしても適當な後繼者を得なければ廢めることが出來ない。熟慮の結果、自分の後を引受けて、得意にも迷惑を懸けずこの店を繼續して行けるのは――』と、明晰の頭腦を以て知れた小池氏は、數名の古い社員が居たに拘らず、特に杉野氏を呼んで、秘密の裡に其の將來を託したのであつた。

而して、大正六年三月小池合資會社は解散され山一合資會社は設立された。それ以來杉野氏は社長として今日に至つてゐるが、小池氏が如何に人物を見る明にも長けてゐたかを知ることが出來る。

山一證券と杉野氏

『日常の禮を欠いて迄貨殖の道を講ずるのは人間の味を知らないのだ』と大悟した處世觀を有ち、それを經營精神として、而も開業二十年でプツリト初志通り廢めた小池氏には、何處となく

變つたところがあつた。

又其の後を引繼けて、この精神に宗教味を加へた、杉野喜精氏の經營精神にも一種の味ひがある。

小池氏等が最初に現物團を組織して、大いに公社債の引受けに氣を吐いて以來、證券界に於ける現物團の存在は一般から漸次重きを置かれるやうになつた。隨つて公社債の引受、新株募集引受等は一層旺んにに行はれるやうになつて、東京現物團、東京證券現物團、東京株式現物團などが出來て來た。

この間にあつて杉野氏は、小池氏以來現物を主として來た關係から、公社債の募集引受等には特に主力を注いで來たやうである。

嘗つて、朝鮮に博覽會が開催された時に、杉野氏は招待されて渡鮮したことがあつた。

『從來朝鮮の農產業は、殆んど自然耕作で、灌漑、用排水などの施設もなく、農業振興上非常に遺憾とされてゐたが、其後官拓によつてドン〳〵大きな堰堤なども設けられ、配水設備も完備し

て見違へるようになつてゐた、

さうして日一日と朝鮮の土地が拓けて行くのを見たときには、自分が朝鮮殖産債券を引受けて努力して來たことが、幾分の力になつたかと思ふと非常に嬉かつた』と語つたことがある。

斯うして、公社債の引受けに努力すると共に、堅實主義をモットーとして業務に精勵し、大正八年には資本金百五十萬に增資するやうになつた。

一方、大正九年には一般取引員組合の副委員長に擧げられ、續いて委員長となり、又國債取引員組合の設立と共にその副委員長に選ばれるに至つた。

其の後順調な二三年が過ぎて、大正十二年の大震災に遭遇し、山一合資の存亡の危機に直面した。

當時、山一合資はあの猛火の渦中に在つて、勿論、建物一切は灰燼に歸してしまつたが、天佑にも四箇の金庫内に保存された現金、有價證券、帳簿類等は辛らうじて災を免れることが出來た。

しかし、耐火設備は施されてゐても、何分强熱の爲めに、それら有價證券類は、わづかに原形

を留める位に蒸燒けとなつてしまつてゐた。

杉野氏は嘗て日本銀行在勤中に、半燒けになつた紙幣が交換されたことを知つてゐたので、その蒸燒けになつた證券類を日本銀行へ持參して、取換へることが出來た。

その額は現金、證券類を合して五、六十萬圓もあつたといふから、山一合資としても大きな問題であつたに違ひない。

而もその中には他人の證券類も預つてあつたので、杉野氏はこれを取換るまでには周到の用意を以て、善處したのであつた。

灼熱した金庫は數日を經るまで冷めなかつたが、若し急激に扉を開けて火を呼ぶやうな結果になつてはならないと、不安焦燥の間にも、細心の注意を以て冷却するを待つた。

その開扉に際しても極めて冷靜に水を用意して、取り出したものであつた。

又、蒸燒けになつた現金や證券類は悉く、美濃紙にソット帖つたが、その數が五千何百枚もあつたといふことである。

斯うした注意によつて幸ひ、現金はわづか五圓札一枚、その外證券類の損害は三千圓程の輕微で免れることが出來た。

其の後、杉野氏は緊張した數年を過した。それに連れて山一合資も以前に倍する信用を得るやうになつて、大正十五年には資本金を五百萬圓に增加し、從來の合資會社を株式組織に改めて山一證券株式會社となつた。

取扱ひ高も漸次莫大な額に上つて、昭和元年頃には一期間、一般公債賣買高片建計算で二億八千萬圓、取扱高は五億六千萬圓、公債募集取扱高は三億六千萬圓といふ數字になつてゐる。

一方會社の基礎も鞏固となつて、二、三年後には百七八十萬圓の積立金を殘すに至つた。

だからその後、金解禁の影響による公社債未曾有の暴落に際して受けた損失も、裕に積立金を以て、充分補塡することが出來、營業の基礎は微動だもしなかつたほどである。

現在では全國重要都市に支店出張所を十一ヶ所設け、一般經濟界から羨らやまれるほど秩序整然としてゐる。

序でに重役を紹介すると、副社長平岡傳章氏、常務太田收氏(營業)取締役淸水太治郎氏(出納)同石川亮三氏(淸算)市川準一氏(現物)木下茂氏(大阪支店長)山口繁氏(公債)監査役漆原正氏(庶務)その他藤田好三郎氏、奥山春枝氏などがあつて、それらの人々が悉く實務に携つてゐるのは五百萬圓の大會社には診らしい。

本年三月には兜町の中心に石造四階建の店舗を新築して、愈々名實共に充實した山一證券となつた。

兎も角、杉野氏は山一證券の經營に衝つて來たと共に、筑波高速度電鐵、日英釀造、東株代行等の重役となり、又大正十年以來東京商工會議所議員に、一般或は業種代表として四回選出せられてゐる。

文藝に親しむ

杉野氏が名古屋時代の交友に、明治文壇の巨壁尾崎紅葉があつた。明治三十六年に有名な「金

色夜叉」を殘して早逝したが、其の生前三年間程の交際であつたらしい。

彼が紅葉を知るやうになつたのは、從兄飯田旗郎氏の紹介によつたものである。旗郎氏は旗軒とも云ひ、有名なソラの「巴里」、「勞働」「金」などを翻譯して、佛蘭西文學で知られた人である。だから、紅葉とも兄弟のやうに親しい間柄であつたので、偶々名古屋の杉野氏に紹介したのである。

當時、杉野氏は紅葉のテキバキしたところや著作に非常に興味を持ち、紅葉も亦彼の男らしいところに共鳴して、その後は深く交際を續けるやうになつた。

元來、彼の一家は文藝に深い趣味を有つてゐて、從兄旗軒氏は勿論その妹(杉野夫人)も、文藝の愛好者であつた。

さうした間に居た關係からか、彼も何時しか文藝に興味を有つやうになつて、今でも義太夫、演劇、俳句などを非常に愛好してゐる。

そのうちでも俳句は生れの月日に因んで、菊六と號して、時々友人知己間に自作を發表してゐると言ふことである。

杉野氏の二男昌甫氏は獨逸に永く留學して演劇學を研究し、歸朝後、上智大學の講師となつてゐるが、昌甫の名は名古屋時代に紅葉が命名したものである。

その外彼は、建築にも趣味を持ち、自ら設計などして目黒の自邸をつゝいてゐるやうであるが例へば階段などに就ても『却々頭が緻密な人で專門の私でさへ驚くほどです』と出入りの大工がいふ位の凝り方である。

筆者の知つた築地の某料亭の女將などは、色々建築に就て世話になつたこともあつて、『設計などは、玄人はだしだ』と譽め立てゝゐる位である。

目黒の現在の邸宅は、震災二、三年前に引移つたものであるが、邸内には有名な「目黒富士」がある。これは文政二年近藤守重が土人を集めて築成したもので、錦繪の大家廣重などにも描かれて、廣く世間に知られてゐるものである。

昔は萬朶を散らす櫻の名所といはれてゐたが、今はこの櫻は失はれて、その代り山の中腹に、

大小のつゝじが点在して、春秋それ〴〵の趣きを添へてゐる。

その中には周圍八間の大つゞじがあつて、昔を語るかに見える。

杉野氏と宗教

杉野氏の親戚であり、信仰上の友である木津無庵氏は嘗て、次のやうな法話をしたことがある。

『上杉謙信が永祿五年川中島の大決戰に出陣した時、春日山の城を出ると間もなく、平素師事してゐた雲洞庵法興和尚が、途中にたゝずんでゐたのを見て、近習をして「兵を進むるは神速を規矩とす、法を弘むる方便は何を以て規矩とするや、この心如何」と問はしめた。法興和尚は直ぐに「兵を進むるは死を先にす、法を弘むるにも死を先にす、今日尚ほ體生を知つて死を知らず」と答へると、謙信馬を進め和尚の前に下つて、

「弱きを見て退き、強きに對つて進む、逆なるや順なるや」と問ひ返へした。和尚間髪を入れず

「死を恐れざるものは安く、生を樂しむものは危し、強弱進退死生の迷悟、當哉」と、死生起脱の眞味を眞つ向から示したので、謙信翻然悟入して「死中に生あり、生中に生なし」と叫んだそうである。手兵八千を率ゐて信玄の二萬に對し、敵陣深く突入して、勝敗を一擧に決しようとした謙信には、この死中の生の悟境があつたのであらう。』

と「死中生」の人間處世上に大切なことを說いた。これは宗教的信仰によつてのみ、初めて得られる境地であらう。

杉野氏が困難な問題に直面した場合、何時も腕をまくつて決意すると、不動の信念が生れて來ると言はれてゐる。これは「死中生」の境地を體得してゐるからであらう。

『私の宗教は高遠な理屈でなく、まあ念佛黨の一人ですネ』と言つてゐるのを見ても、理論を離れて、念佛による妙境に到達しようと精進してゐることが窺はれる。

而も、常に球數を身邊から放さないのは、行住座臥—佛子と共に居る—といふ氣持ちを忘れないからであらう。

杉野氏は現在、誠明學舍といふ學生の寄宿舍に對し多大な援助をしてゐるが、それは名古屋に永く居た關係から、同地の高等學校以上の生徒を收容して、勉學の便を計つてゐるのである。

「進化論」で有名なチヤールス、ダーウインは、病弱の身で七十四才になるまで、生物學の研究を熱心に續けて、幾多學界に貢獻するところが大きかつたが、それは日常生活に極めて規律正しく、攝生を重んじたからであつたと言はれてゐる。

規律正しいところに健康がある。

健康に勝れなかつた杉野氏が尙ほ今日、實業界の第一線に立つて活動してゐるのは、矢張り、斯うした規律正しい日常生活と、信仰のカが齎したものでらう。

（完）

杉野喜精

昭和八年七月二十五日印刷
昭和八年七月三十日發行

【非賣品】

著者　中村一一

東京市芝區西久保櫻川町二十四番地
發行者　中村一市

東京市芝區巴町十七番地
印刷者　荒川富次郎

東京市芝區西久保櫻川町二十四番地
發行所　日統社
電話芝(43)二五九四番

不許複製

—後援者芳名—

杉本正幸氏
小布施新三郎氏
秋間芳衛氏
玉塚榮次郎氏
沼間敏朗氏
武智直道氏
大倉邦彦氏
服部金太郎氏
大塚菊雄氏
藤原銀次郎氏
德田昂平氏
鹽原又策氏
神谷傳兵衛氏
中島知久平氏
小山起三氏

水原嘉兵衛氏
高橋竹藏氏
清水釘吉氏
堀井新治郎氏
岡崎久次郎氏
鈴木忠治氏
渡邊輝綱氏
澁谷正吉氏
山越長七氏
小倉常吉氏
望月軍四郎氏
三輪善兵衛氏
近藤利兵衛氏
佐藤繁吉氏
稻見泰治氏

大川平三郎氏
堀內良平氏
波多海藏氏
古市龍雄氏
前田米藏氏
磯村豊太郎氏
青木精一氏
林　武平氏
井上角五郎氏
植村澄三郎氏
鹽原貞治氏
櫻內幸雄氏
郷　誠之助氏

（順序不同）

中村一一著

大和魂の本體

四六判洋裝假製
紙數二百五十餘頁

近刊

現在歐洲の識者、思想家等間に於て、東洋文化に對する禮讃、渴仰の聲と共に、世界無比なる我大和魂の研究熱が擡頭して來た。然らば大和魂とは何か？ 即ち日本國民的意識であつて、そこに政治あり、經濟あり、宗教がある。

本書は日本國民思想の根本的規準たる、大和魂の檢討であり、考察である。

日本主義的一考察

日本主義的動向

國家觀念の喚起を翹望す

東京市芝區西久保櫻川町二十四番地
日統社發行

御申込次第郵稅のみでお送致しますす

終

日統社刊行